alfresa Pharmacy News No.295 2017.7-❶

FOCUS

編集部発「訪問薬剤師と訪問看護師の連携」

きっかけづくりは「下剤」、状態確認をアピール。熱心な訪問看護師は薬剤師の参加を大歓迎

薬剤師と看護師のシナジー効果

「今までの経験から褥瘡の程度を見れば、どの軟膏に変えるといったことは分かりますが、それを薬学的に説明することはできないので、**処方医に対する説得力をより持たせる**意味でも薬剤師の同行はとても助かります」——。神奈川県横須賀市にある「おひさま訪問看護ステーション」の中村あや子所長は、薬剤師と訪問するメリットをこう説明します。

おひさまは、横浜・横須賀市内で12店舗を展開するサン薬局（本社・横浜市港南区）が今年4月に開設。前月に廃止された横須賀共済病院の訪問看護ステーションの後を受ける形で活動が始まりました。サン薬局では、同分院（15年6月閉院）のステーションとの連携ノウハウがあったといいます。

おひさまでは、横須賀共済病院の職員だった中村所長をはじめとする3人の看護師が横須賀市内を1日10軒ほど訪問。サン薬局の薬剤師は横須賀市内の店舗で訪問経験を積んだ在宅専門の薬剤師で、現在は6人の薬剤師が訪問業務をこなす一方、必要な場合は看護師とともに患者宅を訪ねます。また、近隣の調剤薬局の薬剤師が同行するケースもあるそうです。

看護師との同行訪問について、サン薬局の在宅薬物治療支援部の奈良健部長は「薬剤師はなかなか患者さんを手当てする場面に立ち会うことがないので、**褥瘡などを目の当たりにすることで薬学的管理をより患者さんに近い立場で考えられるようになる**」ことを強調します。訪問先で薬剤師が直接担当医師に連絡して処方を変更してもらう場合もあり、おひさまの看護師・笹尾圭子さんは「看護師だけでは無理なことでも素早く対応してくれる」と同行する薬剤師に信頼を寄せます。

また、**在宅医療を担う開業医のほとんどは一人医師**のため、看護師と薬剤師の両者からアプローチすることで医師も安心するそうです。奈良部長は「横須賀市は在宅医療に熱心な医師も多く、例えば疼痛管理の相談を受けた場合、**看護学と薬学の両観点から説明すると納得する**ようです」と言います。

スタイルを確立するのは「今でしょ！」

65歳以上の夫婦・一人暮らし世帯の増加を背景に、在宅分野は薬学部の学生にも関心の的になっているそうです。取材した当日、奈良部長は大学からの要請で6年生の学生とともに6軒訪問。インターンの学生を横須賀共済病院や横浜市立大附属病院の退院時共同指導のカンファレンスなどにも連れていきます。奈良部長は「会議の場で積極的に発言できなければ、在宅の現場から医師に意見することなど到底できません」と言い切ります。

厚生労働省の2016年度診療報酬改定の影響調査によると、医師が多職種に望む業務の中で最も多かったのは「診療前の事前の面談による情報収集や補足的な説明」（49.9%）でした。在宅医療の担い手のほとんどが一人医師であることを踏まえると、訪問した際に気付いたことなどを薬学的視点から事前にかかりつけ医に伝えておくことも薬剤師の真骨頂といえるでしょう。

● 訪問看護師とのきっかけをつかむコツ

- ○同じ志の訪問看護ステーションを選ぶ
- ○地域の訪問看護ステーションにアピール（何をしたいのか明確に！）
- ○在宅患者の多くに処方されている下剤の話から入る（実際に患者さんの状態を見たいとアピール）
- ○患者さんを主語にした会話を
- ○医師や看護師に説得力のあることが言えるように

では、薬剤師が訪問看護師と連携するには、どのようにきっかけをつくればよいのか——。まず**訪問看護の実績豊富なステーション**を探します。そういう訪問看護ステーションは「薬剤師にも積極的にチーム入ってきてほしい」と考えているので大歓迎だそうです。また、「目的を説明する際は**下剤の話**が手っ取り早い」と奈良部長は太鼓判を押します。在宅患者には下剤が処方されていることが多く、「自分が調剤した下剤が患者さんにどう効いているのか確認したい」などと頼み込むのが早いそうです。外用剤の変更を提案し、その後の経過を確認したいというのも有効だそうです。

「在宅医療のニーズが増えている今だからこそ、薬剤師と看護師が同行訪問するスタイルを確立するチャンスです」と奈良部長は訴えます。

POINT

- 薬剤師と看護師のシナジー効果で処方医への説得力も増強。
- 薬剤師は在宅患者の現場を見ることで、よりリアルな薬学管理を。
- 看護学と薬学の両観点からのアプローチは一人医師の不安も解消。
- 薬剤師も発言力を！ 訪問看護師と積極的に連携し医療ニーズに貢献。